

南傳佛教の一樣相

——シヤム佛教に於ける誦咒——

佐々木教悟

一 パリッタの由來

セイロン、ビルマ、シヤム、カンボジヤ、ラオス等の所謂、南傳佛教の行はれてゐる地域に於て、經典の讀誦と云ふことは、現在如何なる形に於てなされてゐるかと云ふ問題を考察するに當つては、先づパリッタ (Paritta 護咒) と云ふものゝ性質及び由來を明かにする必要がある。このパリッタを誦することは佛陀時代を距ること略と五百年セイロン島に於て發生したものと云はれてゐる。^①西紀前二四六年、かの摩晒陀長老一行の來島以來、この地に佛教は樹立せられ、以後大いに榮えることとなつたが、この島には多くのタミール族 (Tamil, Dāmiila) が南部印度より移住して居り、歴史的事實に徴しても、

かのタミール族は數回に亘つて國家を統治する程の勢力を有してゐたことが知らるゝ。而してこれ等のタミール人は大部分婆羅門教徒であつた。かの婆羅門教の教理に従へば、吠陀 (Veda) の符咒 (Mantra)、讚歌 (Sūkta) を誦するところの者には吉祥を生ぜしめ、或は病氣を防ぎ、民衆に對する種々なる危難を防ぎ護るはたらきがあることを説いてゐる。數多のセイロン民衆は、たとひ佛教に歸依しても、人情の常として吉祥を求め、危難に對して怖れ震く時を持つたであらうことは容易に想像することが出来る。況してや、前記タミールの影響下にありては一層そのことの大きなものがあつたに相違ない。かくして吉祥を生ぜしめ、或は災難より自己を防護せんがために、佛教の中にその道を探し求めた。然しながら、か

の婆羅門教の符咒を誦する方法は天 (Devatā) に對して祝福を請ひ願ふものであり、佛教の教義は明に之とは相容れぬものである。佛陀の教説は修道者が各々、自らを依り處として、その智見を研ぎ、身語の行爲を清淨となし、現在の禍福は勿論、來世の爲の善根功德も問題とせざるものであつたが、一般の民衆に取つては、かやうな第二義的の宗教生活は餘りにも高く、取りつき難いものであり、現實の苦樂に關係する吉凶禍福の問題が、より切實な問題であつたこと^③、思はれる。そこでセイロンの僧伽はかゝる一般大衆の要望を頭から無視することが出來ず、三藏の中を搜し、三寶の徳を讃へる經及び偈頌などを抽き出し、こゝにパリッタとして誦する方法を案出したと考へらるゝ^④。それらの經及び偈頌は、いづれも種々なる理由により護咒として誦するにふさはしき由來を有し、恐らく寶經 (Ratanasutta) の如き經典がその模範的なものとして選ばれたのであらう^⑤。然しパリッタは最初から長い連續せるものとして編纂せられたのではなく、初めは或る特定の經、或は特定の偈頌を夫々の時に應じて、例へば吉祥的な行事に招請せられて行つた場合

に Mangalasutta (吉祥經) を、病氣の者に聞かしめることを請はれた際には Bojjhaṅga (菩提分) を誦すると云ふやうに、適宜行はれたのであらう。而して段々普及する中に、他の事由のためにもパリッタを誦するやうになり、經典や偈頌も漸次加増せらるゝこととなつたのではなからうかと思はれる。

註① Krom Phra Damroḡrājānupāḥ; Tam-nān Phra paritta, p. 5

② 赤沼智善教授「阿舍の佛教」二三四頁

③ 松本文三郎博士「眞言密教の興るまで」(佛教史論所載)には「原始佛教僧團に於ては勿論、公には咒法が禁ぜられたのであるが、併しその禁止の目的はその咒法が攘災招福を目的とする性質を有する場合のもので、廣義に於ける佛教誘導の手段として差支へない場合はその咒法がたとへ婆羅門の行じたところと同じであつても、それを採用することは差支へなく」云々と云はれてゐる。長尾雅人教授「佛教の印度的性格」(印度の文化)、七七、七八頁参照

④ 南傳大藏經第二十四卷、小部經典二、八七頁の寶經に關する水野弘元教授の註

二 パーナワーンの誦唱

上述の如く、各種の經典や偈頌がパリッタとして用ひ

られるやうになると、誦唱の方法を同一の型によつて行ふ爲にも、之を一つに纏めることが必要となる。セイロに於ては、佛曆九百年（西紀三五七）レエワッタ比丘（Revatta Bhikkhu）が中心となり、各種のバリッタを調査してパーナワーン（Bhāṇavāra 誦誦品）と稱する聖典を編纂した。^①このパーナワーンは二十二のバリッタを含む、四部に按排せられてゐる。今、シヤムの王室版誦呪書に基いてそれらを擧げるならば、次の如くである。

Catubbhāṇavāra

Pañhamabhāṇavāra

1. Tisaragagamanapāṭho 三歸依誦文
2. Dasasikkhāpadapāṭho 十學處誦文
3. Sāmaṇerapañhapāṭho 問沙彌誦文
4. Dvattinsākarapāṭho 三十二身分誦文
5. Tainkhaṇikappaccavekkhaṇapāṭho 剎那觀察

自督誦文

6. Dasadhammasuttapāṭho 十法經誦文
7. Maṅgalasuttapāṭho 吉祥經誦文

8. Ratanasuttapāṭho 寶經誦文
9. Karaṇiyamettrasuttapāṭho 應作慈經誦文
10. Ahirājasuttapāṭho 蛇王經誦文
11. Mettānisaṇsasuttapāṭho 慈功德經誦文
12. Mettānisaṇsagāthāpāṭho 慈功德偈誦文
13. Moraparitapāṭho 孔雀咒誦文
14. Candaparitapāṭho 月咒誦文
15. Suriyaparitapāṭho 日咒誦文
16. Dhajagasuttapāṭho 幢頭經文誦

Dutiyabhāṇavāra

17. Mahākassapabojjhaṇḍasuttapāṭho 大迦葉菩提分經誦文
18. Mahāmoggallānabojjhaṇḍasuttapāṭho 大目犍蓮菩提分經誦文
19. Mahācundabojjhaṇḍasuttapāṭho 大淳陀菩提分經誦文

Tatīyabhāṇavāra

20. Gīrīmāṇandasuttapāṭho 山歡喜經誦文
21. Isigilisuttapāṭho 伊私耆梨經誦文

22. Āṭṇāṇiyasuttapāṭho 阿吒毘經誦文

以上がパーナワーン中に攝められてゐるパリッタであるが、いづれも四阿含、小部、本生等の中より抽出せるものである。扱て、このパーナワーンは、その功德等を説明するところの *Sarathasamuccaya* (眞隨義集要) と稱する合計十三束 (貝葉書) に達する註釋書がアノマタッシー (Anomadassi) と名づける長老によつて編纂せられてから非常な權威を持つことゝなつた。そしてパーナワーンが出来てより、セイロンの僧伽に於ては、勤行書として之を用ひた模様である。然しながらこのパーナワーンの中のパリッタをすべて連續一貫して誦するには極めて長時間を要することゝなる。それ故にパーナワーンを誦する方法が考へられねばならなくなり、こゝに誦唱に關する二つの型が案出せられた。即ち四名の僧侶より成るカナ (Gaṇa 聚・組) が數組つくられて、パーナワーンの終り迄を交替して誦するのと、單獨の經、單獨の偈頌を抽き出して、事由に應じて誦するのとである。而して後者の場合は、上座の長老が常に夫々の經及び偈

頌の功德を稱讃するところの序言をもつて之を唱導する。これはカッド・タムナーン (*Khaṭṭam-nān*) と云はれる。この一人の長老の首唱に導かれて他の僧侶は一齊に唱和する。かゝるカッド・タムナーンの方法はパーナワーンよりも先にあつたか、或は後に生じたかと云ふことについては、これを決める端緒がない。なぜなら、兩方共に可能と考へられるからである。セイロン出版のパリッタには、パーナワーン中の殆んどすべてがカッド・タムナーンの句を有してゐる。現在用ひられてゐるシヤム版に於ては、第六の *Dasadhammasuttapāṭho* と次に述べるラーチャ・パリッタ (*Rāja-paritta* 王護咒) と共通の第七、八、九、十六にカッド・タムナーンの句が附せられてゐる。

註①佛曆二四五九(西紀一九一六)出版の *Bhāṇavāra* の *Nai Dharmaratana* 氏の序文

②日暮京雄氏「Paritaの研究」(大谷學報九ノ一)には、*M. Grimbolt* 氏集録のシンハリ文字の寫本に依るとして *M. Léon Feer* 氏が「Extrait du Parita」(*Journal Asiatique*, October, 1891)に掲げてゐるものを再録したと述べて二十九種を擧げらるるが、それは既に加増せられてゐるものであらう。山本快龍教授「泰國の佛教」南

方國の宗教一三〇頁にも二十二種を擧げらる。尙Frank-furter氏の *Pali Handbook* 練習用附録及び高楠順次郎博士の「巴利語佛敎文學講本」には轉法輪經や大會經等をも加へて十四種の *Paritta* が採用せられてゐる。

③ *Rāma III* (西紀一八二四—一八五一) の時この書の大イ語譯がつくられ *The National Library (Bangkok)* より出版せられてゐる。

三 ラーチヤ・パリッタの型態

前述の如く、パーナワーン誦唱の方法が考へられたが、他方また、王室の行事に於ける誦唱のために、吉祥の昌盛と危難の防護と云ふ意味を兩方共に含める、適當なパリッタの組み合わせが考へられた。即ち、前上の意味にふさはしき内容を有するところの、餘り長くない各種のパリッタを選び出して基本となし、之に尊崇するところの偈頌を若干加へてラーチャ・パリッタと稱するものがつくられた。これは、そのラーチャ・パリッタの冒頭に出される

願くば、護咒の威力が人民の主なる王と、王の資産と、王の軍勢と、王の親戚朋友とを恆に護れかし

*Sarajjain sasenanin sabandhuin narindam parit-
ānubhāvo sadā rakkhātūti*

と云ふ句によつても知らるゝが如く、専らパリッタをして國王を保護するものに資せしめんとしたものである。

このラーチャ・パリッタにはチエッド・タムナーン (*Tam-nan*) と、シペンン・タムナーン (*12 Tam-nan*) の二種があるが、前者は *Cularajaparitta* (小王護咒)、後者は *Maharajaparitta* (大王護咒) と云はれる。シヤム本に基いて、左にその含むところのパリッタ名を擧げるであらう。

Cularajaparitta (Ced Tam-nan)

1. *Sarajjain sasenanin*.....
2. *Namo tassa*.....
3. *Namakarāsiddhigāthā* (敬禮成就偈)
4. *Sambuddhe*.....
5. *Namokarāṭṭhakān* (敬禮義)
- ×6. *Mangalasuttain* (吉祥經)
- ×7. *Ratanasuttain* (寶經)
- ×8. *Karajjāmettasuttain* (應作慈經)

- ×9. Khandaparittagāthā (蛇咒偈)
 ×10. Moraparittain (孔雀咒)
 ×11. Dhajaggaparittain Dhajagasuttain (幢頭咒・幢頭經)
 ×12. Āṇāṇḍiparittain (阿吒囊脂咒)
 ×13. Angulimalaparittain (指鬘咒)
 14. Bojjhaṅgaparittain (菩提分咒)
 15. Yandannimittain avamaṅgalañca……………
 16. Dukkhapattā ca……………
 17. Mahākāruṇiko hātho……………
 18. Ratanattayappabhāvabhīyācanagāthā (三寶光願偈)
 19. Sukhābhīyācanagāthā (安樂祈願偈)
 20. Maṅgalacakkavālaḥṭhai (大吉祥鐵圍山) Mahārājaparitta (Sip-son Tam-nān)
 1. Sarajain sasenain……………
 2. Namo tassa……………
 3. Sambuddhe……………
 4. Namokārāṇḍhakain (敬禮義)
- ×5. Paṭhamain Maṅgalasuttain (第一、吉祥經)
 ×6. Dutiyain Ratanasuttain (第二、寶經)
 ×7. Tatiyain Karapīyannettasuttain (第三、應作慈經)
 ×8. Catutthain Khandaparittain Chaddantaparittapaṇāraṇ (第四、蛇咒・別に象咒とも稱す)
 ×9. Pañcamain Moraparittain (第五、孔雀咒)
 ×10. Chaṭṭhain Vajjakaparittain (第六、鵝咒)
 ×11. Sattamain Dhajaggaparittain Dhajagasuttain (第七、幢頭咒・幢頭經)
 ×12. Aṭṭhamain Āṇāṇḍiparittain (第八、阿吒囊脂咒)
 ×13. Navamain Angulimalaparittain (第九、指鬘咒)
 ×14. Dasamain Bojjhaṅgaparittain (第十、菩提分咒)
 ×15. Ekādasamain Abhayaparittain (第十一、無怖畏咒)
 16. Dukkhapattā ca……………
 ×17. Dvādasamain Jayaparittain (第十二、勝利咒)

18. Ratanattayappabhāvābhīyācanagāthā (三寶光願偈)

願偈)

19. Sukhābhīyācanagāthā (安樂祈願偈)

20. Maṅgalacakkavāḷa-ghai (大吉祥鐵圍山)

×の印をつけたものはカッドタム・タム・タムの句を有するものである。

扱て、先づ Cularājaparitā を見ると、第六、七、八、九、十、十一、十二の七種のパリッタがその骨旨にして、これらはいづれも前記パーナワーンの中に存するものである。他は附加的なものと考へられ、特に第三、五、十、八、十九の四種はシヤムに於て附加せられたものである。即ち、第三の Namakarasiddhigāthā (六偈) はクロム・ブラヤー・ワチラーナワロロ僧正、第五の Namokarāṭṭhagāthā (四偈)、及び第十八の Ratana-ttayappabhāvābhīyācanagāthā (十一偈) はブラベイト・ソムデット・ブラチヨム・クラオ・チャウ・ユーホワ(ラーマ第四世)、第十九の Sukhābhīyācanagāthā (十偈) はブラブッタ・コオーサーチャーニン(チム)僧正の編纂になるものである。

Maharājaparitā にいつては、巴利語の番號の付せられてゐる第五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十七の十二種のパリッタがその骨旨にして、大部分が Cularājaparitā に同じである。唯、第八の Khandaparitā に二偈より成る Chaddantaparitāparāṇi が附加せられてゐると、第十二の Atāpāyaparitā が Cularājaparitā の時は十九偈半であるが、今は四十五偈出されてゐると、第十七の Jayaparitā が新に加へられてゐると云ふ差異があるのみである。

以上二種の Rājaparitā の體裁その他を考察するに、パリッタの配列順序の形態と、カッド・タム・タムの句に於ける増加と云ふ點から見れば、シブソン・タム・タムの方がチエッド・タム・タムの方よりも、よく整頓せられて居り、最初のラーチャ・パリッタはチエッド・タム・タムの如きもので、後に修補せられてシブソン・タム・タムの如きものが出來たのであり、しかもそれは、いづれも Sāratthasannuccaya の編纂以後に、セイロンに於てつくられたものと考へられる。古來よりシブソン・

タムナーンの如きものが原初の型にして、後に恐らくセイロン出身に非ざる或る王が之を長過ぎると考へて、チエッド・タムナーンの如きものを作り、こゝにラーチャ・パリッタに二種が出来たとする説もあるが、プラ・ビニチャワンナカーン氏はこれに反対し、ダムロン・ラーチャ・ヤースパーブ氏もこれを支持して、チエッド・タムナーンの如き型が先に出来てゐて、セイロンからシヤムに齎され、國家の儀式に慣例として用ひられる迄になつたところへ、後にシブソン・タムナーンの如き型がセイロンに出来てシヤムにも傳へられたが、前者程には普及して用ひられる迄には至らなかつたのであらうと述べてゐる。^①

尙、このラーチャ・パリッタは、初めは王室の行事の場合にのみ誦唱せられた模様であるが、一般民間に於てもその誦唱を請ひ願ふ風尙が生じ、現在に於ては廣く一般に用ひられるようになってゐる。そしてシヤムに於ては、前述せし如く、シヤムの大長老等により偈頌が増補せられてゐるから、同じくセイロンからラーチャ・パリッタの型を得てゐるビルマやカンボジャ等に於ても、現

在使用のものには多少の相異のあるであらうことは察せらるゝのである。

① Krom Phra Damroṅ Rājānuphāp; Tam-nān Phra Paritta, p. 11

四 その他の誦咒用經典並びに偈頌

上述せるパーナワーンやラーチャ・パリッタ以外に、尙次の如き各種の經典及び偈頌がパリッタ的に用ひられてゐる。^①

- ×1. Dhammacakkapavattanasuttaṃ (轉法輪經)
- ×2. Mahāsamayasuttaṃ (大會經)
- ×3. Anattalakkhaṇasuttaṃ (無我相經)
- ×4. Ādittapariyāyasuttaṃ (所燒異門經)
- 5. Bimbisārasamāgāme Puṇḍrapāṇiṅgāṭṭha
(頻婆沙羅王集會中間句確答偈)
- 6. Saccakiriyaṅgāṭṭha (眞諦所作偈)
- 7. Pabbatopamaṅgāṭṭha (喻山偈)
- 8. Ariyadhaṇaṅgāṭṭha (聖財偈)
- 9. Dhammasaṅgīṇimāṇikapaṭṭha (法聚摘要誦文)

10. Vipassanābhūmipāṭha (觀地誦文)
11. Paṭṭhānamāṭikāpāṭha (發趣摘要誦文)
12. Bhaddekarattagāthā (賢母地偈)
13. Buddhodānagāthā (佛讚嘆偈)
14. Khemaḥkemasaraṇagamanaparidīpikagāthā (安不安歸依燈偈)
15. Dhammagāravādigāthā (法尊崇偈)
16. Aggappasādasuttagāthā (無上淨信經偈)
17. Itipiso…………
18. Buddhamaṇigalagāthā (佛吉祥偈)
19. Anumodanā
おだ、アヌモーター・ウイ・デー (Anumodanā
Vidhi 隨喜の儀軌) と稱し、佛事の終りに際し、
或は勤行作法の結びとして誦せらるゝ一群のものがあ
る、これをもハリック的な性質を帯びるものとして日常用
ひらるゝ。
20. Anumodanā Vidhi
21. Yathā vāriṇahā…………
22. Maṇḍalacakkavajā-ṇoi (小吉祥鐵圍山)
23. Keṇiyanumodanagāthā (闍尼耶隨喜偈)
24. Kāladānasuttagāthā (施時經偈)
25. Vihāradānagāthā (施精舍偈)
26. Devatādisśadakkhiṇānumodanagāthā (梵天見
施物隨喜偈)
27. Devatābhisaṃmantanagāthā (梵天現觀偈)
28. Paritakarapaṭṭha (作護咒誦文)
29. Aggappasādasuttagāthā (前出、十六番と同じ)
30. Nidhikaṇḍa (藏財窟章)
31. Saṅghavathugāthā (僧伽物偈)
32. Bhojanadānānumodanagāthā (食施隨喜偈)
33. Ādīyasuttagāthā (取受經偈)
34. Tirokuḍḍakakaṇḍa (餘章)
35. Saccapānavidhānupagāthā (忠誠水類型偈)
36. Vanaropanasuttagāthā (植樹經偈)
37. Itṭhasuttagāthā (可愛經偈)
38. Manāpadāyisuttagāthā (意下得經偈)
39. 更にまた、かの Mahāsātipaṭṭhānasuttapāṭha (大念
處經誦文) も讀誦用として用ひられるほか、王室の儀式
に關する點燭偈、消燭偈、雨乞式偈、植吉祥偈などの特

別のものもある。尙、以上掲げたものとは別に各種の勤行のために、スラッド・モン（誦咒）と云ふ名の許に用ひられるところの、タム・ワット・チャウ（Tam Vatia Cau 朝の勤行）、タム・ワット・カム（Tam Vatia Kam タの勤行）を含む七十六種の誦文がある。今はこれらを列擧することをしてないが、これはタンマニット派（Dhammayutikanikaya）の型として、種々の經典より抽出して、編輯せられたものであるが、此の中にはラーマ第四世の撰になるもの六種、ラーマ第四世の撰と傳へられてゐるもの四種、ワット・ラーチャプラディットのソムデット・プラサンカラート（大僧正、サー）の撰になるもの一種を含んでゐる。そして現在マハーニカーイ派（Mahānikaya）に於ても、之を標準として、その多くが依用せられてゐる。

扱つてゐるに、スラッドチェン（Svatt Ceng）と稱するものについて一言するであらう。チェンと云ふタイ語は「分ける」「擴大する」「弘布する」と云ふ意味を有し、結集による教説がチェンをもつことを示すのである。これには

1. Phra Sūtra (經)
 2. Phra Vinaya (律)
 3. Phra Saṅgī (衆)
 4. Phra Vibhaṅga (分別)
 5. Phra Dhātukatha (界説)
 6. Phra Puggalapapañatti (人施設)
 7. Phra Kathavattu (論事)
 8. Phra Yamaka (雙對)
 9. Phra Mahāpañhana (大發趣)
- があり、夫々簡單な誦章より成つてゐる。此の中、第三の Phra Saṅgī 以下はブラ・アピタン（Phra Abhidhamma）と云ひ、Dhammasaṅgī (法聚論) を始めとする南方七論を意味する。而して、このチェン、特にブラ・アピタンは一般民間の火葬式、或はすべてのブッパ・エータブリー（Pubbapetali 祖先を弔う佛事）に於て、好んでその誦唱を請ふものとなつてゐるが、それは佛母の「乳と哺養の値として用ひる」にふさはしき功德を有するものがブラ・アピタンであるとの信仰に基くところよりして、人々の風尚と合致してゐる。

註①北傳佛教の流布地域とせられてゐるチベットにも、上述

のバリッタ、及びバリッタ的な誦咒用經典として擧げらるゝものが傳へられて居り、それはセイロン出身の學僧 Ānandacī 親聞する Ni-ma rgyal-mtshan dpal-dzan-po 比丘によつて西藏語に翻譯せられてゐる。大谷目録に云くは、甘殊爾部第四十九函、Cep-phin sna-tshogs (諸般若)の終りに收めらるゝ No. 747 及び No. 759 及びの十三經である。

No. 747 Chos-kyi hkhlor-lo rab-tu bskor-paḥi mdo

Dharmakṛtopravartanasūtra (轉法輪經)

No. 748 Skyes-pa rabs-kyi glen gshi jākanidā

(本生緣記)

No. 749 Lcan-lo can-kyi pho braṇ-gi mdo Ājñāḥi-

yasūtra (瓦世嘉武經)

No. 750 Ḥḍus-pa chen-poḥi mdo Mahāsamayasūtra

(大會經)

No. 751 Byams-paḥi mdo Maitrīsūtra (彌勒經)

No. 752 Byams-pa bsgom-paḥi mdo Maitribhavan-

asūtra (慈觀想經)

No. 753 Bslab-pa lhaḥi phan-yon-gyi mdo Pañca-

ikṣyāṇuḡaṇasāsūtra (五學功德經)

No. 754 Riḥi kun-dgaḥ-byiḥi mdo Giri-ānandasūtra

(山嶽寧經)

No. 755 Kluiḥi rgyal-po dgaḥ-bo rter-dgaḥ ḥḍul-

baḥi mdo Nandopānanda-nāgarāja-daman-
asūtra (調伏難陀優婆塞難陀國王經)

No. 756 Ḥod-sruḥ chen-poḥi mdo Mahākāyapaṣū-

tra (大迦葉經)

No. 757 Ni-maḥi mdo Sūryasūtra (日經)

No. 758 Zla-baḥi mdo Candrasūtra (月經)

No. 759 Bkra-ḡes chen-poḥi mdo Mahāmāḡalasū-

tra (大吉祥經)

Léon Feer 氏は、この中、No. 752, No. 757, No.

758, No. 759 の各經を夫々巴利文のバリッタと對校し、

夫々の Commentary を共に “Extraits du Paritta”

として Journal Asiatique (1891) に掲載してゐる。

② Kaswoḡ Krom-dhāmmakāḥi ; Paḍānukrom p. 193.

③ Sonḍet Krom Phra-parāmāṇuḡijñāros ; Paḥamas-

mbodhi 說法編、轉法輪章第十

五 シヤムに於ける誦咒作法

シヤムに於ては、新に出家せる比丘は、最初の安居に於て、タム・ソット・プラ (Tam Yatta Phra 佛陀に對する敬禮の文章) と、プラ・アピタンとを憶誦し、第二の安居に於ては、プラ・パリッタ (Phra Paritta) チヤム

ド・タムナーン、シブソン・タムナーン)を憶誦し、第三の安居に於ては、パーナワーンと、タンマチャッカパワッタナス(Phammacakkappavattanasūtra)、及びマハーサマイス(Phasamayāsūtra)を憶誦し、爾後の安居には、五安居内にパーティモ(Phimokkha波羅提木叉)を憶誦せしめる、と言ふ一つの格式があり、現在に於ても、大體之に準じてゐるが、筆者は比丘になつた當座にチェッド・タムナーンをも暗誦せしめられた。勿論かゝる場合の憶誦は、佛陀の教法を傳承し護持するために、かの佛陀の法と律とを憶誦すると云ふ本來上の意味に基くものである。扱てこのチェッド・タムナーンは通常のカーン・モンコン(吉祥に關する行事)、例へばタンブン・ルファン(家屋の新築祝ひ等の行事)、チャロング・プラ(佛像の鑄造、開眼等の行事)、コオン・チョク(剃髮式)の場合などに、最もよく用ひられてゐる。而してこれの誦唱には、その全部を誦するのと、省略的に誦するのがある。後者の場合は、第六 Maṇḍasāṇḍita の直前まで誦してくれば、その初めの部分を切り取り、asevaṇā ca balaṇān……に續き、次で

Ratanasutta のカッド・タムナーンの句に至る kotis-atasahasse……を誦し終れば、yakkhiñci vitān……に移り、續ける五頌を誦して、yathindakhiḥ……の khaṇṇaṇ purāṇaṇ 迄は取り去る。そして終りの部を誦して、Karaṇiyamettasutta に移り、その全部を誦するか、若しくは初めの部を切り取り、mettaṇca sabbalokasmiṇ……より後を誦するかする。次の Khandapariṭṭa もすべてを誦するか、若しくは初めを切り取り、appamāṇobuddho……より以後を誦するかする。次の Moraparīṭṭa は抜き、Dhaggasutta の Anusātipāṭha の部分のみ、即ち itipiso bhagava 以下の lokasāṭṭhi を誦す。Aṇṇāṭṭipariṭṭa は buddhaṇ vandaṇa sotamanti 迄のみで後は略す。次の Angulimālapariṭṭa は主として比丘僧伽の行事の場合は、直に bojjhaṇṇo satsaṅkhāto……より始めるが、在家に於ける場合、初めの yatohān をも共に誦す。かくて natthi me saraṇaṇ aṇṇaṇ に及び、yakkhiñci ratanaṇ loke を誦し、その後は適宜に終了するのである。いづれにせよ、新たな箇處へ移る際は、一人の長老が最初の句を唱導

するから、その間に少しの混乱も生ずることがない。

一般民間のチャロン・アーユ(長壽祭)、及びワン・クウッド・(誕生日記念)などのタンブン(善根を積む行事)に於ては、かゝる省略的なチェッド・タムナーンを用ひるが、Maṅgalaśutta の直前に Dhammacakkrapavattanaśutta が加へられる。その他タンブン・ソップ(遺骸を安置して死者を弔ふ佛事)の七日、五十日、百ケ日、一周忌などには、前上、轉法輪經の替りに Dhammaṇiyanasutta (法不變經)・Tilakkhaṇadigaṭṭha (三相偈) が加へられる。タンブン・チェッド・ワン・アツテイ(初七日遺骨供養)、或は火葬式より續くところのプロット・ツウツク(苦より離脱したとの意)と稱する佛事に於ては、前上、轉法輪經の替りに Supubbabbaśutta (妙華經)を挿入する。ペンスクン・ソップ(ペンスクンは塵堆、ソップは屍骸の意にして、人の死亡せし際の佛事の一種)、若しくは、アツテイ(骨)に關する佛事の際は、通常 Maṭṭika が用ひられる。即ち Namo……の始ち(一)Dhammasaṅgajimātikāpāṭha (法聚論摘要誦文)、Vipassanābhūmipāṭha (觀地誦

文)、Paṭhanamātikāpāṭha (發趣論摘要誦文)を誦するのである。尙、すべての種類の招待に於て、僧侶が食事)をなす場合は、その直前にクワイ・イ・ボン・プラ(祝福の詞を贈るの意)と稱する五一頁上段第十七番の Itipiso Bahū…… Mahākāruṇiko …… Sabbamaṅgalān ……の組み合わせになる誦唱がある。アタモオータナーは勤行が終り、施者より布施が贈られた時に誦せらるゝが、これに通常のもと、特別のものがある。特別のものは、その行事の性質に應じて、通常のアタモオータナー、即ち Yatha varivaha から始まる sabbitiyo にて終るものに引き續いて、他のアタモオータナーの偈を加へる場合を云ふ。第三 Kenyanumadanagaṭṭha は行事の性質に應じて、次の第四、第五の偈を導き出すために導師なる長老が一人で誦唱する。第四の Kaladanasuttasāṭha は迦稀那衣式の時、第五の Vihāradanagaṭṭha はボット(布薩堂)、ウイハーン(伽藍)、サーラー(休憩所)、クテイ(僧房)等の建立の際に、第六 Devatādis-sadakkhiṇaṇumodanagaṭṭha と、第七 Devatābhisam-mantanagaṭṭha は家屋の新築祝ひ、及び結婚式等に用

ひると云ふように夫々適當な誦唱方法が案出せられてゐる。

古來より、特別な國家的吉祥行事、例へばツウ・ナム(誓忠式)、レエク・ナー(始耕祭)の如き場合は、チエッド・タムナーンを一日誦し、威力獲得の行事、例へばチャンロング・アーユ(長壽祈願祭)、テエン・ガーン(結婚式)等の場合は、シブソン・タムナーンを誦すと云はれてゐるが、現在では變更せられて居り、シブソン・タムナーンの如きは、誓忠式、始耕祭、萬壽節等の王室に關する儀式の際にのみ、ワット・シーラタナサーサダラーム(ワットプラケオの本名)の布薩堂に於て誦せらるゝこととなつてゐる。國家的儀式の中でも、國王の即位式、皇太子の洗浴剃髻式、雨乞式、過年節、重要な佛像の鑄造式、戰勝紀念式等に於ては、かのパーナワーンが誦唱せらる。最初は五名の僧侶が王の臥褥の上に坐して誦し、王はその部屋にて之を聴いたと傳へらるゝが、ラーマ第四世の時に少しく變更せられ、皇殿に牀座を設け、僧侶は四名が一組となり、各二名宛が交替して誦することとなつてゐる。即位式のような大儀式の際

は、プララーチャ・カナスラッドと稱して三晝夜行はれ、小儀式の際は、タンマスラッドと稱して、それは一晝夜で終了する。^①

三日間に亘つて行はれるものでパーナワーンを讀まない或る種の國家的儀式がある。例へばサーロオット(秋節・鞞韁の儀式)の如き、初日はチエッド・タムナーンを、中日はシブソン・タムナーンを、第三日は轉法輪經と大會經を誦すと云はれてゐる然しこれも、ラーマ第五世の時より、シブソン・タムナーンが省かれて二日目に轉法輪經、三日目に大會經が用ひられることになつたと云はれてゐる。前述の萬壽節や皇太子の剃髮式も之に準ずる。

このパーナワーンの誦唱は非常に神聖視せられ、正確な、完全な發聲が要請せられたために、暗誦を避けて、書物を用ひて讀むようになつてゐるが、讀誦用として用ひれた本書の最も古いもので、シー・アユタヤー時代(二三五〇—一七六七)に肉筆で書かれたものが、現在國立圖書館に保存せられてゐる。

註①王室の儀式に關しての詳細な記述は、ラーマ第五世の撰述になる Ruang Phra-rai-widhi sipson duon (王室儀式十二ヶ月)と云ふ有名な書物が存する。

六 ナム・モンの誦成

ナム・モン (Nām-Manta 咒文にて作られる神聖な水) を作ることはパリッタ誦唱の一部門である。パリッタの誦唱が行はれる時は、いつでも鉢 (鐵鉢の類) か若しくは甕が置かれ、清水が充たされて、その縁に蠟燭が點ぜられる。そして白い棉系の束が持ち出され、その一端が佛像の臺座に結びつけられ、これを延ばして鉢か甕を一巻きするかしてこれに繋ぎ、更に延ばして、參勤の比丘はすべてパリッタ誦唱の間、終始片手にてこれを把持する。誦唱が開始せられ、*sakkaṭva*……の句 (即ち、チエッド・タムナインの終りの句) 迄誦してくと、上座の長老比丘が、かの蠟燭を取り、鉢の縁を廻はしつゝ蜜蠟を水中に滴下する。咒文の句が終了するや、蠟燭を鉢内の水に沾濕して火を消すのである。かくの如くしてつくられた水は聖水として大切に扱はれ、大抵は佛事の終了せし際、樹の小枝に浸して、施主その他俗人の參列者の頭に滴らすか、或は櫛を振るようにしてふりかけたりせらるゝが、これによつて罪が淨められ、威力が與へらるゝとするのである。

王室に於ては、灌頂式等の儀式に於ては云ふ迄もなく、その他洗顔や沐浴のために、特別にナム・モンが必要とせられた。それ故に王宮内には、ナム・モンを誦成するためのホー・シャーストラークム (建物の名) が設けられ、各四名のプラクルー・プラパリッ・タイと、プラクルー・プラパリッ・モオンなる官職の僧侶が、これに奉仕すると云はれてゐる。

尙、ナム・モン誦成とは關係はないが、次の如きマハータイプ・モン (Mahāḍḍi-ba-mantṛa) と稱する一聯の咒文があり、安産の爲に、壽命長久のために、勝利をもたらせるために誦せられたと云ふが、特に軍隊が征途につかんとする時、毎夜に互つて之を誦して軍人に聞かしめたと傳へてゐる。

1. Mahāḍḍi-ba-mantṛa (大天咒)
2. Jayamaṅgala (勝利吉祥)
3. Mahājaya (大勝利)
4. Uḥaḥisavijaya (佛頂尊勝 Uḥaḥisavijaya は tantra の名)

5. Mahasāvāṅga (大アーサーワ支分、Āsava は Soma 汁を壓搾する祭官)

これはシー・アユタヤー時代に、現在の佛印ラオスのヴィヤンチャンに於て編纂せられたもので、これがシヤムの南部にも傳へられ、初めは僧侶が誦したが、後にタイ語のクロオン^②(詩の一種の型態)風に譯せられ、俗人の誦士をして巴利語文と、その譯文との兩方を誦せしめたと云はれてゐる。四名の誦士が牀上に坐して誦し、その音調は美韻にして、大層悅耳的なものであり、後になるに従つてその音調の美が競はれたと云ふ。然るにその音調がスラッド・ソップ(火葬式の時の誦唱)と類似してゐるところから、ラーマ第五世の時に至つて廢止せられた。かくしてマハーティプ・モンの誦唱はなくなつたが、その替りに、ナワクラハーユ・シム・タム^③(Nayay grahayu Sorn-dhamma 法と結合せる九星の壽)としての誦唱が発生し、音調の方はスラット・タムノーン^④(Svatt Tam-nong 音調を持つ誦唱)として發展するものとなつた。

註①この棉糸を使用する行事は數種あり、バンスクン・ペエ

ーン(生存者の生命維持を請ふもの)、バンスクン・タ
ーイ(死者を前にして涅槃經四句の偈を唱へるもの)の
時などがその例で、前者の場合は、本人に布を被せて、
その一端に結びつけ、後者の場合は遺骸を納めた棺に結
びつけて、參列の僧侶全部がその棉糸を片手の親指と人
指指の間にはさみ、夫所々定の經文を唱へるが、これら
の場合はナム・モンを作るのでないから鉢も蠟燭も用ひ
ない。

②太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星、天王星、海
王星の九星を祀り、危難を防ぎ、吉祥壽福の與えらるる
ように九星に供養を捧げる意味をもつものであるが、こ
れら九星の各支に對して夫々バリツタが喻定せられたカ
ウ・タムナーン(9 Tam-nan)と稱するものがあるが、
紙幅の都合で、今は割愛する。九星に對する供養は井原
徹山氏「印度教」第七章參照。

③火葬式の際に、四名の比丘によつて行はれるスラッド・
チエーン^④もタムノオン^⑤の一種であり、その音調は美
韻である。比丘は戒律により、一切樂器に觸れることは
ないから、スラッド・タムノオン^⑥の場合、木魚、鈴、
音木の如きものは一切使用しない。尙、これとは別にタ
ムノオン^⑦・テエーツと稱して節をつけて行ふ説教が
ある。五聲を有するタイ語獨得の聲音により聽衆をして
恍惚たらしめる。

七 シヤム佛教に於ける婆羅門

教の影響

上來述べた各種の誦唱をもつ佛教的行事を眺めるに、そこには實に數多くの婆羅門教的要素の混入が認めらるゝ。否、純粹に婆羅門教のものと云つて差支へないものが澤山ある。抑ゝ婆羅門教と佛教とのいづれが先にシヤムに齎されたかについては、歴史上明かにせられてゐない。然しながらクメール族の來住と共に印度文化の齎されたであらうことは容易に想像せられるところであり、佛教の傳來を阿育王の頃とすれば、佛教傳來以前に既に印度人の來住はあつた筈であり、是等の印度人の多くは婆羅門教徒であつたと云はれてゐる。^①西紀第六世紀の半頃カンボジャの勢力下にあつたロッブリーを中心とし、更に降つて西紀八〇〇年頃スマトラのシー・ウイチャイ (Grijiaya) 王國の支配下にあつたナコン・シイタマラートを中心として大乘系の佛教が流通し、觀世音菩薩の信仰が盛んに行はれた。それ故にシヤムに於ても、この時代にはサンスクリト語による經典が依用せられたと云はれてゐる。^②然しながら、この大乘佛教は印度教の要

素を多分にんで含ゐたと云はれ、特に十世紀頃になると、隣國のビルマに於ても、密教的な佛教が行はれて居り、シヤムに於ても、かゝる影響の皆無であつたとは云ひ得ないものがある。^③西紀一二五七年スコタイ時代になると、ラーマカムヘーン大王はタイ族自身の手になる統一的國家の建設に成功し、從來の佛教を廢して、新にセイロンより純正上座部系の佛教を迎へ、佛典も巴利語のものを使用、寺院、佛塔も從來のコオームの様式(タイの統一國家建設以前のクメールの手法を藝術上からコオーム (Khom) の手法と稱する)を離れて、セイロンの様式を採り入れた。シー・アユタヤー時代になると、代々の王はいづれも小乗佛教を保護し、之を弘通した爲、クメールの佛教に於ける菩薩の信仰は廢せられて、婆羅門教の天の神崇拜が之に替へることゝなつた。この梵天の崇拜はシヤムの佛教徒の間にも何らの矛盾もなく受容せられた。^④而してラタナコーシン時代 (西紀一七八二年以降) となるや、クメール宗教の名残を表はすべき最後の機會を持つた。現王朝のラーマ第四世は、その登位前二十六年もの長き間、僧院にあつて比丘生活をな

し、佛教に關する深き知識を有し、最も熱烈なセイロン上座部系佛教の信奉者であつたが、他方、婆羅門教の僧侶をも厚く遇した。そして從來よりも一層多くの婆羅門教儀式を王室の儀式として採用し、嚴重に之を行ひ、次の第五世第六世も大體之に従つた。即ち、政治に威嚴あらしめる宗教が支配者達に好まれたのである。確に婆羅門教の教義は王者に威嚴と權力とを與へるものであつた。然し幾多のタブーによつて國王を圍んだ婆羅門教の儀式主義も、近代精神の洗禮を受けて次第に凋落の一途を辿らねばならなくなり今日に到つてゐるが、根強き印度教的文化を母胎とするシャムの佛教は、精靈崇拜等の俗信をも包容して、阿闍婆吠陀 (Atharvaveda) 以來の祈願懇請願望讃嘆を含む念誦、即ち、マントラでは、それはパリッタの誦唱であり、その中心は飽く迄、プラ・サンマーサンブッタ・チャウ (正等覺者・佛陀) であることは云ふ迄もないが、かの誦咒と云ふことに、今も尙大きな役割を與へてゐるのである。但しこゝに注目すべき點は、ワット (寺院) に於ける各種の行事でも、一般民衆を對象とするものにあつては、一方にブッチャー・ウイサツチャナー

(問答説教)^⑦があり、他方にカウ・ティップ (天食祭)^⑧があつたりしても、比丘僧伽のみに關するウボソツ (Uposatha 布薩)、パンサー (Yassa 安居)、パワーラナー (Pavarāṇa 自恣) 等、其の他幾多の戒律上の儀軌に對しては、明瞭なる一線が劃されてゐて、今日と雖も、飽く迄戒律佛教としての面目を保持してゐることである。

註① K. P. Landon; Thailand in Transition (和譯本「二

〇三頁)

② この時代につくられたサンスクリットの刻文は G. Coedès; Recueil des inscriptions du Siam, 2. Vols. Bangkok, (1924) の中に蒐集整理せられてゐる。

③ 立花俊道教授「ビルマの佛教」(南方園の宗教) 九一頁以下「ビルマに於ける大乘並びに密教の諸本」海外佛教事情一ノ五、龍山章眞教授「南方佛教の標幟」五六頁

④ 宇井伯壽教授「阿含に現はれたる梵天」印度哲學研究第三、立花俊道教授「禪宗と婆羅門教」(原始佛教と禪宗) 參照。

⑤ Reginald Le May; An Asian Arcady (Cambridge: W. Heffer & Sons, Ltd, 1926) p. 135. 尙 A. J. Irwin; Siamese Ghost here Demonology, (Journal of Siam Society, 1904-1910) 參照。

⑥ 宇井伯壽教授「阿含に現はれたる梵天」印度哲學研究第三一〇八頁、尙、阿闍婆吠陀の性質に關しては德永孝生氏「吠陀文學」八三頁以下參照。

⑦ Pucchi'isajjana 四名の學識ある比丘が正方形の四隅に位置する高座の上にあがりて、本生談等に關する説教を順次行ひ、夫々の説教に於ける話題を中心に興味深く問答し合ふ行事にして、三時間乃至四時間休憩なしに續けられる。聽衆堂に溢れ、非常に魅力あるものとなつてゐる。純粹に佛教的な行事である。

⑧ Khao-diya (dibba) 俗人の施主が發起してデーワダ(天神)を祀る行事にして通常三日間に亘つて行はれる。寺院内のサーラーに自在神の像を安置し、豚の頭の丸煮や、茹で卵を棒に突き刺したものなどが祭壇に供へらる。一方、急設の小舎の中に設けられた四つの釜にて米、果物、シロップなどを投げ入れて煮る。四、五時間煮て飴のようになれば、之を樹の葉で作つたカトンと稱する器に少量づつ入れ、その中央に金箔の小片を貼りつける。これがカウ・ティップと稱せらるる祭神に捧げる供物である。他方、住職以下全僧侶出席して勤行が行はれ、その間、冠をつけ美服を纏つた子供九名(男五、女四)が音楽に合はせて舞踊を行ふ、又、六名の僧侶によりて説教が行はれ、一般男女は夜半迄、樂器に合はせてラム・トン(シヤムの踊り)を行ふ。これは佛教寺院にて行は

れる大がかりな婆羅門の祭祀にして、最も民衆化せるものの一つであらう。

本稿はシヤムの僧院滞在中(一九四四年三月—一九四五年十一月)に於けるささやかな研究の一部である。紙数の都合にて、バリッタの思想内容等に關する部分を別稿にゆづり、上記の如き題を付したものである。記述に不十分な點もあり、或は誤謬を犯せる箇所もあらうかと思はれる、大方の御叱正をお願いする次第である。

(昭二三、七、七附記)

最近本學圖書館着本洋書目

- The Dictionary of Philosophy by Dagobert D.
Runes (Philosophical Library)
- The New Dictionary of Psychology
by Philip Lawrence Harriman
(Philosophical Library)
- An Encyclopedia of Religion
by Vergilius Ferm
(Philosophical Library)